

青年の語りからみた日常的解離の発達について^{1,2)}

——事例研究による体験・意味づけ変容モデルの検討

舩田 亮太

九州大学大学院人間環境学府

本研究では、青年における日常的解離の体験・意味づけに関する変容モデルを検討した。研究1では、大学生・大学院生・高専生計130名(平均20.11歳)を対象に、日常的解離自由記述質問紙を実施した。KJ法の結果、日常的解離大カテゴリーとして「うわの空・空想」「没頭・没入」「自動的行動」「同時行動」「出来事の詳細健忘」「近距離への遁走」「自己の客体化」「感覚の鈍化」の8つに分類された。研究2では、大学生・大学院生計28人(平均20.64歳)に半構造化面接を実施し、うち女性3人には再度3年後に面接実施した。事例研究の結果、「うわの空・空想」「没頭・没入」「自動的行動」「同時行動」「自己の客体化」の5つが該当した。そして3人の語りから、日常的解離の体験・意味づけの変容は個人の発達状況・発達課題と大きく関連していることが示された。

キーワード：青年、日常的解離、語り、事例研究、体験・意味づけ変容モデル

問題と目的

1. 日常的解離体験について

解離とは「意識・記憶・同一性などの通常は統合されている心的機能の統合性喪失」を意味し(田辺, 2002), DSM-IV-TR (American Psychiatric Association, 2000)では解離性障害としてまとめられている。一方で、空想、没頭、自動行動、離人感といった比較的軽度で一時的な解離体験は健常者にもよく生じるといわれている(田辺, 2002)。Ludwig (1983)は、解離は本質的には適応的な機

能を果たしており、病的な解離体験は、その適応が破綻した状態であると説明している。「解離の適応的機能」とは、①行動の自動化(車の運転中、途中の景色を覚えていないこと)、②努力の経済性・効率性(一つの課題に没頭すること)、③解決不能な葛藤の回避・解消(解決不能なことを他人事のように感じる)、④現実的制約から離れる(お寺・教会での強い祈りによる超越的状态)、⑤破壊的体験の隔離(心的外傷体験の健忘、遁走)、⑥感情のカタルシスの発散(祭り、儀式での情動表出)、⑦仲間意識の醸成(国家的・宗教的活動による集団帰属感の強化)の7つである。

発達の観点からは、軽度の解離体験は、青年期・成人期前期に他年代層よりも多く体験することが報告されている(足立・足立・赤沼・武川・池田・足立・加藤・新井, 2005)。舩田・中村(2005)は、今後の軽度の解離研究を円滑に進める

- 1) 本論文は日本心理学会第68回大会、日本心理臨床学会第24回大会、日本パーソナリティ学会第16回大会で各々発表したものをまとめ、加筆・修正した。なお本研究は、日本学術振興会特別研究員科学研究費の補助を受けた。
- 2) 懇切丁寧なコメントを下さいました審査者の先生方に、また質問紙調査、面接調査に御協力下さいました皆様に、深く感謝致します。

ため、日常生活の中で体感し得る解離を「日常的解離」と命名し、「意識・記憶・同一性・知覚・運動・感情の遮断・喪失が一時的・限定的なもの。本人に自覚があり、それらの体験から自分の意志である程度戻ることができる統制性のある解離」と定義した。そして、日常的解離尺度の作成を試みた。これまで解離は、虐待、災害、犯罪被害による外傷体験を受けた者についてしか検討できなかつた。しかし、「日常的解離」概念を用いれば、外傷体験を受けていない健常者についても、解離体験を検討できるようになる。そして、健常者の日常的なストレスと、解離体験の関連を検証できるようになるだろう。よって本研究では、舩田・中村(2005)に基づき、以降の軽度の解離を「日常的解離」と呼ぶこととする。青年期の日常的解離を研究していくことは、日常的解離への援助法の確立(治療的側面)だけでなく、自己理解・管理の促進(予防・教育的側面)といった意義もあると思われる。

2. 青年期の日常的解離研究

青年期の日常的解離研究における問題点は、①先行研究の大部分が解離性障害患者を対象としていること、②先行研究の大部分が尺度を用いた量的研究であること、③先行研究では、日常的解離体験に対する意味づけの発達・変容について検討されていないこと、以上の3点である。

第1に、先行研究は主に医療機関で行われており、解離性障害患者へ心理療法を実施した単一臨床事例研究³⁾が非常に多い(舩田・中村, 2007)。近年の解離性同一性障害55事例の特徴をまとめた累積的臨床事例研究(舩田・中村, 2007)によ

ると、中学校・児童相談所・大学保健センターといった医療機関以外での臨床事例研究は計4例であった。医療機関に入院した重度の青年解離患者の臨床事例研究はあっても、青年における日常的解離体験についての研究は、我が国ではまだ萌芽的段階である。解離の発達モデルとしては、田辺(2002)の病的解離⁴⁾の発達モデルがある。しかし、田辺(2002)の発達モデルは主に病的解離に限定されている。青年が多く体感する日常的解離体験の発達・変容については新たに検討する必要がある。

第2に、先行研究が尺度使用による量的研究に限定されている理由として、解離内容の異種混合性(田辺, 2004)の問題が大きい。これまでの研究では、解離性体験尺度(Berstein & Putnam, 1986)について因子分析を行うと、「没頭・没入」「健忘」「離人」の解離の主要3側面に分類可能と考えられている(Carlson & Putnam, 1993)。しかし、解離性体験尺度項目として挙げられている体験はどの因子にも高く寄与する相互相関的なものであるため、因子分析的手法で解離の体験内容を分類すること自体が困難であるとも指摘されている(田辺, 2004)。実際の体験内容も独立して起こるだけでなく、相互に関連した同時体験として表出する場合(ex. 空想している自分を横から見ているという離人体験)もある。従来の量的研究のみでは、青年期に多様で相互同時に表出する日常的解離を捉えることは不十分である。しかし質的研究法を用いるにしても、異種混合的、相互相関的な解離概念については、非専門家にとっては理解し難く、何の制限もなしに調査協力者に自由記述や面接聴取を行うと、得られるデータは解離体験以外のものが多くなり、解離の定義から離れたものになってしまう危険性が高い。それゆえ、先行研究の多くは、概念の操作化が行い易く、唯

3) case study の訳語について、木下(2003)は「事例研究」、Willig(2001)の訳者の上淵・大家・小松(2003)は「ケース研究」としている。本稿では、「事例研究」の訳語を採用し、以下統一して記す。また、本稿では、研究者が調査協力者に対して行う「事例研究」と区別するため、臨床現場で精神科医師・臨床心理士がクライアントに心理療法を行ったものを「臨床事例研究」と統一して記す。

4) 田辺(2002)では「不適応解離」とされているが、本研究での用語の統一性のため、「病的解離」と言い換えた。

一信頼性、構成概念妥当性が様々な方法で検討されている解離性体験尺度を用いた量的研究に依拠してしまっていると思われる。

第3に、先行研究では、日常的解離体験に対する意味づけの発達・変容について検討されていない。解離性障害の臨床事例研究では、解離症状の消失過程に伴ったクライアントの内的世界の変化、意味づけの変容が記述される。しかし、日常的解離のように、DSM-IV-TRに代表される医学的診断基準に合致しない概念の場合、臨床事例研究で記述されることは少ない。能智(2001)は臨床的援助の対象とされる危機的状況が、当事者にどのように生きられ、体験され、語られるかに注意を向けることは、医学的視点から定義されがちな臨床症状が見直され、援助方法に関する新たな洞察をもたらすと述べている。以上から、青年期の発達において、日常的解離体験がどのように個人の中で発達・変容するか、また日常的解離体験をどのように意味づけているかを縦断的に調べ、仮説生成する必要がある。

能智(2000)では、比較的軽度の脳外傷をもつ人々の語りの収集・観察を通じて、彼らの自己喪失感が「自己史の喪失感」「不透明な自己」「レッテルづけられた自己」「価値の低下した自己」という4つのサブカテゴリーが相互に関係し合って、精神的健康に影響していくことを述べている。この知見は、実際の臨床現場で当事者の語りを聴くうえで、より幅広い枠組みを提供するものである。

本研究では、体験内容の同時性や相互関連性をとらえるために質的研究法を選択した。そして、調査協力者から語られるインタビューデータが日常的解離に収束するように、事例研究法により得られたデータを、KJ法で分析した。

3. 質的研究法の選択について

インタビューデータに対し、明確にデータ収集法・分析法が確立されているものとして、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach, 以下 GTA: Strauss & Corbin, 1990)

がある。GTAは、例えば人間と人間の直接的やりとり、すなわち社会的相互作用に関係した人間行動(ex. 看護, 介護 etc)を説明する際に使用することが適するものである(木下, 2003)。その方法は、初期のデータから仮説モデルを暫定的に導き出し、さらに追加データを用いてモデルを洗練させ、それ以上新たな知見が得られないという理論的飽和状態に達して終了する、というものである。しかし、日常的解離は、体験全てが人間と人間との直接的なやりとりとは限らない(ex. ショックなことを思い出して、一人空想にふける)。また、体験頻度・体験内容も大きく個人によって異なる。日常的解離に該当する体験をきちんと語るができる調査協力者に出会うまで、仮説モデルを全く作成できない可能性がある。一方で、ストレスコーピングのような日常的解離とは異なるデータが多く追加され、作成モデルが全く不適当なものになる可能性もある。以上から、本研究では理論的飽和化にいたるのが非常に困難と判断し、GTAを採用しなかった。

また木下(2003)は、「GTAで必要な理論的飽和が到らなかった時、またインタビューの中で、特に豊富なデータを提供してくれた人がいれば、その人についての事例研究を行うこと」を推奨している。そのため、本研究では事例研究を採用した。

事例研究は、研究目的により様々な方法がとられ⁵⁾、大きく固有対道具的事例研究、単一对多元的事例研究、記述的対説明的事例研究に分類される(Willig, 2001)。本研究は、道具的、多元的、説明的事例研究にあたる。本研究では、研究への協

5) 固有事例研究は、主に稀な障害をもつ患者に選択される。道具的事例研究は、関心のある現象を経験している人が分析に適した事例となる。単一事例研究では、一つの事例により、関心をもつ極端な現象を表現する。多元的事例研究では事例を比較分析することで理論の発展・修正を行い、新しい理論を作り出す。記述的事例研究は、既存の理論を使わずに、その文脈の中での現象の記述を行う。説明的事例研究は、関心下の出来事を説明するために、説明的な概念を文中に組み込む。

力が得られたデータの中から、日常的解離体験について最も豊富な言語的説明がなされたデータを事例として選択した。

4. 日常的解離自由記述質問紙の利用

田辺・小川(1992)では解離性体験尺度日本語版を作成する際、事前に質問紙を配布し、質問紙に回答した調査協力者から個人の解離性体験を聴取する、といった2段階抽出方法を採用している。事前に質問紙に回答することで、調査協力者の日常的解離に対する理解が促進され、体験の有無、体験内容・体験状況が明確化される。そして半構造化面接においてもその質問紙を研究者と調査協力者が互いに参照しながら話すことで、調査協力者は体験時の詳細やその意味づけについて答え易くなるであろう。

また本研究では、質問紙から得られたデータを、KJ法で分析した。KJ法を用いれば、データが日常的解離概念に該当するかどうかを複数の専門家で議論できる。また、社会的相互作用のない個人内のみでの体験でも、仮説生成的に分類していくことができる。

更に日常的解離の体験状況には、日常のストレスと外傷体験が回答されることが予想される。病的解離の発達に個人の外傷体験が寄与する(田辺, 2002)ように、日常的解離にも外傷体験が寄与している可能性が高い。しかし、外傷状況の定義範囲には、曖昧な部分が多いという指摘もある(小西, 2003)。本研究では、狭義の外傷状況よりも幅広い状況を含む「外傷的状况」と定義した上で、ストレス状況と区別し、データを分析した。

以上のことから、本研究では、日常的解離の体験内容・体験状況を捉えるために、日常的解離自由記述質問紙を作成した(研究1)。次に、自由記述の結果に基づいて半構造化面接を行い、日常的解離体験の意味づけを検討した。加えて、豊富な語りを示し、かつ追調査可能な事例について、縦断調査を行った。縦断調査の結果から、日常的解離の体験・意味づけ変容モデルを生成した(研

究2)。

研究1 日常的解離自由記述質問紙の作成と体験内容・体験状況の検討

目的

日常的解離の体験内容・状況の分類を行う。

方法

調査協力者 大学生, 大学院生, 高専生計130名(男性30人, 女性100人, 平均年齢20.11歳, SD 2.08, range 18-30)。

調査時期 2003年12月, 2004年11~12月。

質問紙について 青年が体験する日常的解離の体験内容・体験状況を調べるために、上述したLudwig(1983)の解離の7つの適応的機能を参考に、自由記述質問紙を作成、各々の講義中に質問紙を一斉配布・回収した⁶⁾。自由記述質問紙については、Ludwig(1983)の解離の7分類の体験を明記し、1分類につき3項目を回想刺激(Table 1)として作成した。各々、「あてはまらない」~「あてはまる」の5件法で回答させ、その下に自らの体験を自由記述させた。また外傷体験との関連として、外傷的状况にまつわる各個人の具体的エピソードを自由記述させた⁷⁾。

結果

1. 日常的解離の体験率について

7種の体験ごとに、各質問項目の体験率、平均、 SD をTable 1にまとめた。体験率は、「あてはまらない」以外の回答をした人の割合である。体験率

6) 舩田・中村(2005)の日常的解離尺度を用いなかった理由は、Ludwig(1983)の体験内容分類が調査協力者にとって理解しやすいと考えたため、また現実的に2003年12月の調査時は日常的解離尺度が未だ開発途中であったためである。

7) 教示文は、「嫌な体験をしたときに、上記①~⑦の対処方法にあてはまるような方法を用いた具体例がありましたら、上記項目を参考にお書き下さい。(提示例)バイト先で非常に強く怒られたとき、誰か他の人が体験しているように感じていた。祖母がなくなってショックだった時、いつの間にか家に帰っていた。etc」というものであった。

は、7.7%~96.2%の範囲に存在した。体験率が一番高かった項目は、「気になることはあるが、好きなことをしている間は没頭して忘れている(96.2%)」で、体験率が一番低かった項目は、「コックリさんや霊を呼んで、自分の悩みを相談したり占ったりする(7.7%)」であった。青年期の日常的解離において「興味ある物事への没入・没頭」が大きく占め、「神仏的特異体験」の占める

割合は極めて小さいことが示唆された。

2. 日常的解離の体験内容について

例示した21個の体験例から収集した自由記述の回答について、臨床心理学専攻の大学院生2名、学部4年生3人の計5名でKJ法を行い、日常的解離と判断された体験を小カテゴリーに分類した。その際、神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野(1995)を参考に、コーピング行動と判断された

Table 1 日常的解離自由記述質問紙の質問項目、体験率、平均値、SD

質問項目	体験率(%)	平均値	SD
I. いつのまにかある行動をしている。(行動の自動化)			
1. いつも慣れている道で車や電車に乗っていると、途中の景色を全く覚えていないことがある。	81.5	3.21	1.45
2. 夜いつのまにかふとんを敷いたりベッドまで移動していた事に、朝気付く。	40.8	1.87	1.26
3. 勉強や仕事で、知らぬ間に何か別のことを書いていた。	53.1	2.09	1.30
II. 別のことをしながら、気にせずもう一方の事に集中する。(努力の経済性・効率性)			
4. 音楽を聴いたり、TVを見ながら勉強や仕事をする。	89.2	3.55	1.39
5. 何か別のことを考えながら、人の話を聞く。	94.6	3.70	1.83
6. 気になることはあるが、好きなことをしている間は没頭して忘れている。	96.2	3.69	1.18
III. 解決が難しいことに一時的に対処する。(解決不能な葛藤の回避・解消)			
7. どうしようもないことを、まるで他人事のように感じてやり過ごす。	65.4	2.43	1.31
8. 自分ではできないような事を、別の人間になったつもりで実行する。	53.8	2.06	1.24
9. 自分では耐えられない程の状況の時、いつの間にかその場所から逃げ出している。	73.8	2.55	1.23
IV. 神仏的なものにすがる。(現実的制約から離れる)			
10. お寺や神社、教会でお祈りをすると、心静かで穏やかな気持ちになりリラックスできる。	62.2	2.76	1.43
11. コックリさんや霊を呼んで、自分の悩みを相談したり占ったりする。	7.7	1.13	.50
12. 何かが自分に乗り移ったように感じて、気分(テンション)が高くなる。	23.0	1.47	.98
V. どうしようもないことは忘れてしまう。(破局的体験の隔離)			
13. とても嫌だったことを、いつの間にか忘れている。	79.2	2.95	1.40
14. 非常にショックな出来事もすぐ忘れてしまう。	60.0	2.11	1.19
15. 誰にも言いたくない程の体験を、夢にみる。	70.0	2.74	1.48
VI. いやな感情を発散する。(感情のカタルシスの発散)			
16. お祭りやカラオケで歌ったり踊ったりして、たまったストレスを発散する。	92.3	3.74	1.22
17. 旅行に行ったときは、ハメをはずす。	88.5	3.28	1.25
18. スポーツの試合等で、狂ったように応援する。	72.3	2.64	1.38
VII. 何らかの集団的なものに参加して、気持ちを吐き出す。(仲間意識の醸成)			
19. みんなでいる時に、とても一人では行えないような行動をする。	77.7	2.65	1.18
20. 違う人になったように行動して、知らない集団にも溶け込む。	50.0	1.91	1.12
21. ペンネームやハンドルネームを使って、まるでその世界の一員になったように安心する。	28.5	1.59	1.05

注. 体験率は、「あてはまらない」以外の回答をした人の割合を示す。

小カテゴリー（カタルシス、放棄・諦め、気晴らし etc）を除いた。そして、同種の内容とされる小カテゴリーをまとめ、大カテゴリーとした。各体験を小カテゴリー、大カテゴリーにまとめた結果を Table 2 に示す。大カテゴリーとして計 8 カテゴリーに分類・抽出された。結果は、「自動的行動」（68 件）が極めて多く、次に「同時行動」（37 件）、「うわの空・空想」（26 件）、「没頭・没入」（24 件）が同程度で、「自己の客体化」（19 件）、「出来事の詳細健忘」（17 件）、「感覚の鈍化」（12 件）が少なく、「近距離への遁走」（3 件）が極めて少ないというものであった。

また外傷的状况と、その時体験された日常的解離について Table 3 にまとめた。その結果、「近距離への遁走」が少ないのは日々の生活状況と同様であった。しかし、外傷的状况においては、日々の生活状況とは反対に、「自己の客体化」（11 件）、「出来事の詳細健忘」（8 件）、「感覚の鈍化」（6

Table 2 日常的解離自由記述質問紙の KJ 法結果

大カテゴリー	小カテゴリー
うわの空・空想 (26)	話にうわの空 (15) ぼーっとした状態になる/する (7) ショックな体験でぼーとなる (4)
没頭・没入 (24)	没頭して忘れる (5) 非現実性で没頭 (5) 好きなこと、気になることだけに集中してしまう (7) 一つに集中してまわりが聞こえない・覚えてない (4) 悩み事・考え事をしていて、その間のことを覚えてない (3)
自動的行動 (68)	行動開始を覚えてない (17) ショックな体験で、行動開始を覚えていない (2) 行動途中から覚えてない・意識してない (20) ショックな体験で、行動途中から覚えてない (1) 何らかの刺激されたことを、意識せず書く (4) 何らかの刺激されたことを、意識せず言う (2) 何も刺激なしで、意識せず言う (3) 何も刺激なしで、意識せず書く (8) 寝る前、寝ている間に何かしている (6) 緊張で、自分で体を動かしていない気がする (2) ショックな体験で、意識せずフラフラ歩きまわる (2) ショックな場所に行くと、その内容を意識せず言っていた (1)
同時行動 (37)	～しながら～する (37)
出来事の詳細健忘 (17)	ショックな出来事の詳しい内容を思い出せない (17)
近距離への遁走 (3)	ショックな体験後、気づいたらその場所から逃げていた (3)
自己の客体化 (19)	面倒なことを自分に関係ないと思う (2) ショックな体験を他人事のように思う (9) 自分を客観的にみつめる (4) ショックな体験をしている自分を、自分がみる (3) ショックな体験で、周りを自分とは違う世界のように感じる (1)
感覚の鈍化 (12)	失敗したことを、しばらくそのままにしておく (2) ショックな状況なのに笑う (3) ショックな体験で、感覚が鈍くなる (7)

注. ()内の数字は記述数。

Table 3 日常的解離大カテゴリーと外傷的状况

日常的解離大カテゴリー	外傷的状况	のべ計数
うわの空・空想	死別(母), 交通事故	2
没頭・没入	バイトでの大きな失敗	1
自動的行動	死別(2:父, 祖父) 失恋, 性被害	4
同時行動		0
出来事の詳細健忘	死別(5:祖父, 父, 母, 家族の一人, 友人) 親の離婚, 失恋, 水難事故	8
近距離への遁走	受験での圧力	1
自己の客体化	死別(5:祖母, 曾祖母, 大伯父, 祖父, 父) 叱り(5), 水難事故	11
感覚の鈍化	死別(2:曾祖母, 大伯父), 痛み(親知らず) 死の告知(祖父), 親からの叱り, 性被害	6

件)が多い。「自動的行動」(4件), 「うわの空・空想」(2件), 「没頭・没入」(1件)は少なく, 「同時行動」(0件)は全く行われていない, という結果になった。

考察

研究1の結果は, Kunzendorf, Crosson, Zalaket, White & Enik (1998-1999) が主張する, 外傷状況でよく用いられる「健忘」「離人」を病的解離, 日々の生活でなされる「没頭・没入」を非病理的な解離とする視点と一部一致する。しかし, 「うわの空・空想」「没頭・没入」「自動的行動」といった大カテゴリーにおいても外傷的状况での体験が示されている。このことから, 日常的解離は日々の生活状況, 外傷的状况において, 選択されるカテゴリーの大まかな枠組みはあるものの, 個人の発達状況や選択するカテゴリーの意味づけ, といった個人差によって選択されるものが変わってくる, と考えられる。

研究2 日常的解離の体験・意味づけ 変容モデルの生成

目的

日常的解離の体験・意味づけの発達の变化を探

る。

方法

調査協力者 初回面接調査(以下, 初回面接)大学生, 大学院生計28人(男性8人, 女性20人, 平均年齢20.64歳(range 18-27, SD 2.02)。追面接調査(以下, 追面接)大学4年生2名, 社会人1名の計3名(全て女性)。

調査時期 X年3月(初回面接), X+3年3月(追面接)⁸⁾。

調査形態 研究1で個別面接を承諾した人に対して半構造化面接を行った。場所は, 大学内の個室面接室で行った。回答時間は主に約30分~1時間程度であった。その中で, 日常的解離を3種類以上体験し, それらの体験状況・意味づけについても豊富な語りを示した3名に追面接を依頼した⁹⁾。3名全員から承諾を得て, 大学内の個別面接室で追面接を行った。追面接の回答時間は, 約2時間~2時間半であった。なお, 追面接協力者の3名には, 追面接した後日に本研究の調査意図を再度説明した上で, 過去に精神科・心療内科通院歴

8) 調査協力者のプライバシーを守るため, 厳密な日付を避けた。

がないことを確認した。回答は、調査協力者の了承をとってボイスレコーダー (OLYMPUS Voice-Trek V-50) で録音した。全ての調査協力者が録音・録音データの論文発表を了承した。

質問内容 初回面接, 追面接共に, 日常的解離の各体験について, 研究1の日常的解離自由記述質問紙を参照しながら質問を行った。初回面接では, 各調査協力者が「あてはまる」と回答した体験項目, 自由記述内容を中心に聞いていった。日常的解離の各体験項目, 自由記述内容について, ①どのような場面・状況で体験したか? (体験状況), ②いつからそのような体験をしているか (体験時期), ③その体験をすることを自分としてはどのように思っているか? (意味づけ), ④全体を振り返ってどう思うか (振り返り) を半構造化面接中に質問した。追面接では, 日常的解離自由記述質問紙に加え, 初回面接時の逐語記録を調査協力者に提示しながら, 面接を行った。なお「日常的解離」という言葉は初回面接, 追面接共に, 面接終了後まで用いなかった。

倫理的配慮 質問することが侵襲的にならないよう調査協力者の意思を尊重しながら, 聴取した。回答の拒否, 録音の停止がいつでも出来ることを伝えた。また面接後, 調査によって過度に不快な

9) 初回面接を実施した他25名は, 日常的解離の「自動的行動」「同時的行動」の2種類以下を体験するのみで, それらの体験への意味づけは上記3名とほぼ同様のものであった。彼らの語りを逐語に起こした記録は, 文字数にして平均2365文字 (range 865-3665) であった。一方で, 初回面接での3人の語りの逐語記録は, Aさん約3700文字, Bさん4800文字, Cさん4600文字で, より多かった。このようなことから, 3名を豊富な語りを提供する協力者を判断し, 事例研究の対象とした。なお追面接時の逐語記録は, Aさん約22000字, Bさん約29000字, Cさん約32000字となった。追面接の際に逐語記録文字数が増加していることは, 調査者, 調査協力者が互いに慣れ, 調査協力者が緊張せずに語り易くなっていること, そのため所要時間数が倍になっていることに加え, 初回面接逐語記録を互いに参照しながら, 調査者と話し合っていることが関連している。

心理状態が喚起されていないことを口頭で確認し, ディブリーフィングを行った。

結果

初回面接, 追面接を行った3名について Table 4 にまとめた¹⁰⁾。研究1の8つの日常的解離大カテゴリーに従って, 調査協力者の語りを分析した結果, これまでの日常的解離体験を振り返りながら, 自己を捉え直す (能智, 2000) といった作業が認められた。3人の日常的解離大カテゴリーの体験時期, 各面接時の体験状況, 意味づけについて, 初回面接時, 追面接時を比較し, Table 5 に示した。以下, 調査協力者の語りを引用しながら日常的解離の体験内容・意味づけについて変容点を中心に示していく¹¹⁾。

「うわの空・空想」「うわの空・空想」体験は, 3人とも該当し, 体験状況は通学電車・授業・会議・会話中であった。

Aさんは, 会議中の「うわの空・空想」体験について, 初回は「ファンタジー小説の続きを作るのが楽しい」と肯定的意味づけを行っていた (Table 6)。追面接時は「暇がなく絵空事をばかり考えていられない」と否定的意味づけに変容し, 体験自体も減少がみられた (Table 7)。

Bさんは, 電車内・会話中の「うわの空・空想」体験について, 初回面接では事実を淡々と語るのみであった (Table 8)。なお初回面接時のBさんは, 一問一答のような答え方が面接序盤に多く, 感情面を言語化し難いように感じられた。そのため, 質問の侵襲性を考慮し, この体験に関して意味づけの質問をしなかった。一方で追面接時では感情

10) 調査時期を下山 (1998) の発達区分に照らし合わせるならば, 初回時は3名とも大学生1, 2年生で青年期後期の段階, 3年後の追面接時は, Aさん, Bさんは大学4年の卒業時, Cさんは社会人1年目が終わるといった成人期前期の入口の段階にあたり, 以下その発達区分に従って論を進めている。

11) 面接中の調査者自身の発言は< >で示した。調査協力者の発言の中で文意が読み手にわかりにくい部分は, 前後文脈から筆者が () で補足挿入した。

面に自分から言及することも多く、意味づけの質問も行い易かった。追面接では「かっこ悪い」、「人に迷惑がかかる」と、対人関係面を理由に否定的意味づけを行っていた (Table 9)。

Cさんは、電車内での「うわの空・空想」は初回面接時みられたものの、追面接時は、電車時は仕事をすることが多く、体験自体がなくなっていた。また、会話中の「うわの空・空想」体験については、初回面接時は「効率的」と肯定的に意味づけていた (Table 10)。追面接では、「人の話は聞くべき」と、対人関係面から否定的意味づけを行っていた (Table 11)。

「没頭・没入」「没頭・没入」体験は、3人も該当し、体験状況は読書・自然体験・神への祈り・球場での応援、であった。3人に共通して、「没頭・没入」体験は初回面接時・追面接時共に肯定的意味づけがなされ、体験自体の減少はあっても、意味づけの変容はみられなかった。

「自動的行動」「自動的行動」体験は、Aさん、Bさんのみに該当した。Aさんの体験状況は授業中の無意識的な落書き、起床・就寝時の無意識的な支度であった。Aさんは、初回面接時では、それらを「普通のこと」、追面接では、授業中の無意識的な落書きについて「暇つぶしになる」、起床就寝準備については「便利」と共に肯定的意味づけをしていた。

一方で、Bさんの「自動的行動」では、変容点がみられた。初回面接時は、授業中の無意識的な落書きを語るものの、追面接時はその体験自体が消失していた。また初回面接時、会話中の無意識的な発言についてBさんは「不思議に思う」と言うのみであったが (Table 12)、追面接時は、「人に迷惑をかける」と対人関係面から否定的意味づけをなしていた (Table 13)。

「同時行動」「同時行動」体験は、Bさんのみに該当した。Bさんの体験状況は、TV・音楽を同時に鑑賞しながら、レポートに適宜没頭する、というものであった。初回面接時、追面接時ともに、

Table 4 初回・追面接協力者の性別、年齢、所属

氏名	性別	年齢	所属	年齢	所属
		初回時 (X年3月)		追面接時 (X+3年3月)	
Aさん	女	19	大学1年	22	大学4年
Bさん	女	19	大学1年	22	大学4年
Cさん	女	21	大学2年	24	社会人

それらを「得意なこと」と、肯定的に意味づけ、体験自体も同程度であった。

「出来事の詳細健忘」「感覚の鈍化」「出来事の詳細健忘」「感覚の鈍化」体験は、3人の面接協力者において、該当しなかった。

「近距離への遁走」「近距離への遁走」体験は、Bさんのみに該当した。それは主に小学生時に、教室内で友人から叱責をうけた際に無意識的にその場から逃げ出す、という体験状況であった。初回面接・追面接共に、「幼いために我慢できず、仕方ない」といった中立的意味づけがなされていた。

「自己の客体化」「自己の客体化」体験は、Bさん、Cさんに該当した。Bさん、Cさんの共通する体験状況は、他者からの叱責状況であった。

Bさんは初回面接時・追面接時の両方で、「悲観的だが大事なもの」「逃避的だが振り返りの意味」と、中立的意味づけをなしていた。一方で、初回面接時と比べて追面接時は体験内容の変容点がみられた。初回面接においてBさんは、失敗時や友人・親からの叱責状況の同時ないし直後に「叱られている自分を自分が見る」という「自己の客体化」体験を語った (Table 14)。しかし、追面接時は、失敗時や叱責時を受けた日の帰りの電車内で『『うわの空・空想』体験をしながら叱られている自分を自分が横から見て、理想的な話に過去を再構成する」という体験変容を語った (Table 15)。

また、初回面接でのCさんは、親からの叱責時に「距離がある感じになる」ことを語った (Table 16)。しかし、追面接時は「ぼーっとなって、叱ら

Table 5 初回・追面接協力者における日常的解離大カテゴリーの体験時期、体験状況、意味づけ

	体験時期	うわの空・空想	没頭・没入	自動的行動	同時行動	出来事の 詳細経緯	近距離へ の遁走	自己の客体化	感覚の 鈍化
Aさん 初回 (19歳)	体験状況	中学～大学1, 2年	中学～大学	大学					
	意味づけ	電車・授業・話し合い	読書・自然体験	起床・就寝の支度 授業時の落書き	なし	なし	なし	なし	なし
3年後 (22歳)	体験状況	電車・会社説明会	読書・自然体験	起床・就寝の支度	なし	なし	なし	なし	なし
	意味づけ	暇がなく、絵空事を 言われてられない。	今は少ないが、 得意な方法。	便利 時間の有効利用。					
Bさん 初回 (19歳)	体験時期	中学～大学	高校～大学	中学～大学1, 2年	高校～大学		主に小学生	中学～大学	なし
	体験状況	電車	読書・神への祈り 球場での応援	授業中の落書き 会話時の発言	勉強時	なし	教室で友人 から叱責時。	失敗時。友人や 親からの叱責時。 悲観的だから 大事な方法。	
	意味づけ	人との会話時	落ち着き リラクセス	戸惑い	得意なこと		幼いから 我慢できない。		
3年後 (22歳)	体験状況	電車・会話	読書・神への祈り 球場での応援	会話時の発言	勉強時	なし	なし	叱責を受けた日の 帰りの電車。 入浴、就寝時。 悲観的、逃避的。 ストーリーの再構成。 振り返りの意味。	なし
	意味づけ	かっこ悪いが、 気分が落ち着く。 止まらなさが苦痛。 人に迷惑がかかる。	読書は落ち着き、 優雅な気分。 祈りは落ち着く。	戸惑い 人に迷惑をかける。 注意して話すべき。	得意なこと				
Cさん 初回 (21歳)	体験時期	高校～社会人	主に高校					高校～大学1, 2年	
	体験状況	電車・会話	自然体験	なし	なし	なし	なし	親からの叱責時。 自己防衛、現実逃避。	なし
	意味づけ	一人で考える事が嫌。 現実逃避	落ち着き 必要な時間				もっとぶつつかるべき。		
3年後 (24歳)	体験状況	会話時	なし	なし	なし	なし	なし	体験は少なく、 度合いも弱い。 自分の責任として 受け止めるべき。	なし
	意味づけ	効率的でよいと思うが、 人の話は聞くべき。							

Table 6 Aさん(X年3月初回面接)会議中の「うわの空・空想」体験

会議多いから、ぼーっとしてる。いつも怒られる。おおまかに何のことを話してるかはわかりますが、細かい結果どうなった、とかがわからない。何だっけ?って。自分に関係ないと思えば、ぼーっとしてた。色々考えてた。ファンタジーが好きなんでそういう本とか読んでたら、その続きとか、絶対こうだよ。小説家とかにもなりたかったんで、自分で本を頭の中で作ったり。<(空想を)止められるのは嫌?>そう、邪魔って。<止めない方がいいわけね?(笑)>はい(笑)

Table 7 Aさん(X+3年3月追面接)会議中の「うわの空・空想」体験

<これも今も?>そうですね。自分に関係ないと思ったら聞いてない。<ぼーっと、ファンタジー系のお話を作っているのはどうかな> 当時に比べたら、あんまり考えてないと思います。今はそんな暇じゃないから。授業のときとか、ほんとに座って、何もすることがないっていうときは考えるんですよ。<それについて自分ではどう思う?>大人になったなって(笑)<詳しく?>絵空事ばかり考えていられなくなったんだって。

Table 8 Bさん(X年3月初回面接)電車内での「うわの空・空想」体験

(うわの空・空想は)電車ですね、あと高校時代はバスでいってたんで、全然覚えてなくて。<本を読んでたとかではなくて?>(景色) 見てるんですけど全然覚えてなくて。<その時は何か考えてる?>考えてるときもあれば、普通にぼーっとしてて、はっと気がついて、あっもう着いたと。<考えてときの内容は?>学校でのこととか、サークルのこととか、色々……。<何も考えてないときとかもある?>はい、特に何も考えてないだろうけど、ぼーっとみてて、あっもう着いたと。

Table 9 Bさん(X+3年3月追面接)電車内での「うわの空・空想」体験

こうなったらうれしいな、みたいな希望みたいなのを空想とか妄想して。で、ちょっと楽しくじゃないけど、気分落ち着かせるみたいなことしてたりとか、無意識的に色々考えていっちゃって。<そういう自分をどう思われますか?>よく考えたら、ちょっと嫌っていうか、うーん、結局は失敗してるのを無理やり楽しくさせようとしてるからちょっと嫌かなとか、かっこ悪いとか、そういう風には思うんですけど、やっぱりつい、やってしまうというか。(結局は失敗してることは)絶対もうどうにもならないんですけど、頭の中ではこう、うまくいったとか、もうちょっとちゃんとできてた風になってて。

Table 10 Cさん(X年3月初回面接)会話中の「うわの空・空想」体験

(会話中)全く関係ないことを考えてるときもあるし、そのことを考えてることもあるし。相手の話が相談的なことだったら、何を悩んでるんだろうと相手を中心に考えますが、全く関係ない、昨日何があっただけね~という感じだったら自分のことを考える。今日は何しよ~とか。相談的な内容でも同じことだったら、もう(意識が)飛びますね。<自分の悩み?>そうですね、自分の悩みがあって相手がさして緊急性のない話だったら。まあ楽しいことも考えますけどね。いろいろ、ほんとにぼんぼんと飛びます。人と接しているときの方が、考えているのかもしれない。ひとりでしたら考えたくないからぼーっとして。

Table 11 Cさん(X+3年3月追面接)会話中の「うわの空・空想」体験

今は、人と話していたら話半分で「うんうん」って聞いてて、何も考えてなくて、「あれ、何の話やったっけ?」っていう無意識の感じ。まあでも、誰の話もきちんと聞いてきちんと覚えている人になりたい。<何か思われるところが?>人の話をきちんと聞いてなかったらそれから先の会話で困るじゃないですか。だからじゃないかな。相手に申し訳ないし。効率がいいことがとても好きなんです、私は。だからその場その場でこれは今必要なのかとか、次これやったら早いとか、そういうことを常に多分考えてたりするんですよ。<そのスタイルについてはご自分としてはどういうふうに考えていますか?>人の話はちゃんと真面目に聞かなきゃなと思いますけど。社会に出るといって(社会には)出てないんですけど、やっぱり環境が変わってくるし、そういうので。

Table 12 Bさん (X年3月初回面接) 会話中の「自動的行動」体験

(会話中に)何か言ってるつもりじゃないんですけど、バツこう出て、友達が「えっ？」で。「えっ、私なんか言っとった？」って言ったら、「えっ、ふつうに言ってたよ〜」と。「ほんと？私自分では言ってるつもりなかったんやけど〜」って。今はあんまりないんですけど、中高とか結構あって。こうみんなて話してて、全然違うことを言って。全く違うことを言って、私がもししたら何か考えて言ってるのかもしれないんですけど、ほんと意識してなくて。(友達に)「えっ？」と言われて、私も「えっ？」と。私そんなの言っていないし。結構長い文で、それまで考えてた内容なのかもしれないんですけど。<じゃあ、その後はびっくり？>そう、言ったつもりないし。

Table 13 Bさん (X+3年3月追面接) 会話中の「自動的行動」体験

<これは今は？>今は全然(ない)。こういう風に無意識に変なことを言ったら、それこそ友達関係で(大変)。この場合(Table 12)は仲いい友達だったから特に問題もなくこれたんでしょうけど、もしこれがそこまで仲良くない友達とか、仲いい友達でももし変なことを言ってしまって、それがほんとにけんかになってたりとかしたら大変だったと思うし。<じゃあお友達も慣れてきて、と書いてるから結構仲いい友達？>たぶん冗談で通じたんだろうな。<知らない人だったら？>ちょっと危なかったな。<意識しないで言うっていうのはほかの人に関わってくるから？>そうですね。

Table 14 Bさん (X年3月初回面接) 叱責時の「自己の客体化」体験

嫌なことがあったりすると、私は結構他人事のように遠くから見ることがあって、自分がもう一人いるみたいな感じで、外から自分をみるような感じでみてやりすぎず感じがあって。で、自分じゃなくて、他人みたいな感じで他の子の話みたいな感じにして。そういう風にして自分が辛いのをなんとかかわらげよ〜みたいな。私が(嫌なことを)受けたんじゃないわ〜みたいな。結構悲観的に考えちゃうんで、その辛さを少しでも和らげないと、と思って。<それについて、自分ではどう思いますか？>すぐ人の事とか、本でみた話みたいな、自分がうけた体験を別の主人公がうけたことのようにしてとかして、落ち着かせるみたいのがクセみたいになっているので、結構自分の中で定着しているな〜と。

Table 15 Bさん (X+3年3月初回面接) 叱責時の「自己の客体化」体験

<今これは？>前とは違って、それを振り返ったときに、他人が受けたような感じで、やり過ぎずというか、もう一回ちょっと見ると感じてすかね。多分怒られたときとかっていうのは、そのときはできなかったこと、反論を返してるじゃないですけど。<事実とは違う？>事実とは違うんですよ。自分が落ち着くように、いいように再現し直してるっていうか。<再構成？>そうですね、はい。<昔はすぐ受けたときに体験するという話でしたが？>今はちょっとタイムラグというか、大体、大学であったことは帰りの電車の中でみたいな。<それについてはどう思う？>例えば、怒られてるときに私じゃないわよ、みたくするのは逃げてる感じがして。それはいけないっていうふうは今思ってる。でも今自分がしてる、後でもう一回考え直して良いように(再構成する)、っていうのも別の対処法ないのかなとは思ってますけど。ま、一応それで自分の心を落ち着けられてるならいいかなって。

れてる体験と同時進行に頭の中で想像する感じ」「以前の方が度合いが強い」と、「うわの空・空想」体験と「自己の客体化」体験が同時に起こるといふ体験の変容を語った(Table 17)。更にCさんは、初回面接時に「自己成長につながらない」という否定的意味づけをなしていたが、追面接時には「周囲に対し無責任」と発言しており、同じ否定的意味づけでも、その理由は個人面から対人関係面に変容していた。

考察

まず、体験内容の変容については、「うわの空・空想」「没頭・没入」「自動的行動」「自己の客体

化」の4つが、成人期前期に移行するに従って体験が減少した。更に「うわの空・空想」と「自己の客体化」体験が同時に起きるようになる、といった体験内容自体も成人期前期には変容を遂げていた。日常的解離の体験頻度は青年期をピークとし、以降低下していくことは足立他(2005)でも述べられているが、体験内容の同時性については先行研究では検討されていない。この知見については、クライアントの日常的解離体験を臨床心理士がより詳細に理解する手がかりになる可能性があり、他事例でもみられるか否かを今後再調査していく必要がある。

Table 16 Cさん (X年3月初回面接) 親からの叱責時の「自己の客体化」体験

悩んでる自分も客観的にして、あたしのことじゃなくて悩んでることも他人の事のように考える事が多くて。悩んでる自分も外から眺めてる私がいるとみたいな。壁を作りますね、多分自己防衛。そのことで自分を守っているというか、ガードですね。<もやがかったり、漠然としたりする？>そういう感じよりも、距離がある感じですね。<ご自分としては（これらを）どう思いますか？>あまりにも冷静ですぎる、客観的にみすぎているので、自分のこととして考えれていないんじゃないかと。自分を守りすぎかなと、もっと前に出て考えなきゃいけないことがあるんじゃないかと。あたしが嫌な体験によって成長するということがないんじゃないかなと。対処ばかり上手になってもと……。そればかり上手くなるから。結局、もうちょっとぶつかっていかなきゃいけないんじゃないかなと。

Table 17 Cさん (X+3年3月初回面接) 親からの叱責時の「自己の客体化」体験

<これは今は？>最近こんな状態がなくて、他人事のようにやり過ごす経験がなくて。<ここ1年くらいはない？>そんならいだったら（ある）。<（今は）距離がある感じとかは？>なんか場面を想像してるかも。怒られてるとか言われている場面を、また頭の中で想像してる感じ？<映像的にとか、ほんとに上から見てる感じとかではないんだけど、怒られてる自分を頭の中で想像して？>うん、同時進行で頭で再現してるんです。そういう時は何も深く考えていない。ただ聞いているというか、もう耳に入って、目に入ってという状態になってるんだと思います。<さっき（「うわの空・空想」体験）のぼーっとして？>うんうん、ぼーっとする状態で、考えてはないんだと思います。<度合いがあるんですね？>うん、度合いはありますね。<ちょっとこの時（初回面接時）は、強め？>多分そうだと思います。<今はこういうスタイルについてどう思われますか？>うーん、こういうのが必要な時期だったんだと思いますね。でもなんかそういう時にきちんと考えなきゃなって思います。考えなきゃ問題は解決していかないし、人に迷惑をかけるし、自分の役割をきちんと果たせないだろうなって今は思います。大学の時は全然責任とか無くても良かったから、自分に対してだけ責任を持てばよかったけど、社会に出たら他の人に対しても責任を持たないといけなくなるから、だと思っています。

意味づけの変容については、初回面接の「うわの空・空想」「没頭・没入」「自動的行動」「同時行動」体験において肯定的意味づけが行われていた。しかし、追面接での「うわの空・空想」「自動的行動」体験は、他者との関係性・社会性といった理由から、否定的意味づけに変容されていた。これは、個人内の同一性獲得を重視する青年期後期では、日常的解離の体験数が多く、体験をする自己について肯定的に捉えることが比較的可能であるが、対人関係・社会性を重視する成人期前期の段階では、日常的解離を体験する自己は一部否定的なものに変容されることを示している。3人の語りにおいて、Aさん「絵空事ばかり考えていられなくなった」(Table 7)、Bさん「もしこれがそこまで仲良くない友達なら大変だったと思う」(Table 13) と、個人から対人関係・社会性の重視に伴って、肯定的意味づけから否定的意味づけに変容がみられている。また、Cさんの「自己の客体化」体験のように、青年期後期・成人期後期共に、否定的意味づけをなしている場合もあった。しかし、その場合でも、「自分の気持ち

は守れているけど、ずっとそのまま成長してない」(Table 16) という同一性の課題による否定的意味づけから、「社会に出たら他の人に対しても責任を持たないといけない」(Table 17) と、対人関係・社会性の課題による否定的意味づけへと変容されている。この時期は発達のみにみれば、同一性から親密性へとその発達課題が変化する時期であり、本研究の結果から、日常的解離の体験・意味づけもその発達状況に沿うような形で変容している。以上から、日常的解離の体験・意味づけの変容は個人の発達状況・発達課題と大きく関連していることが示された。

総合考察

本研究では、日常的解離の体験・意味づけ変容モデルを生成した。研究1, 2から日常的解離大カテゴリーに関する体験・意味づけ変容モデルを作成し、Figure 1にまとめた。ここでは、研究1, 2に共通して該当した「うわの空・空想」「没頭・没入」「自動的行動」「同時行動」「自己の客体化」について説明する。

同一性獲得を発達課題とする青年期後期の段階では、人は日々の生活状況において行動の効率化を図るため、またストレス状況から自身を守るために、「自動的行動」「うわの空・空想」「没頭・没入」「同時行動」という日常的解離を高頻度で体験する。そして、それらの体験について肯定的に意味づける。しかし、「親密対孤立」といった対人関係・社会との関係を重視する成人期前期の段階になると、「同時行動」を除いて日常的解離体験は減少する。そして、体験について否定的に意味づける。このモデルは、単に日常的解離体験が精神的健康を阻害するか否かではなく、発達時期を考慮してその体験への援助方針を定めることの重要性を示唆している。例えば、大学学生相談において、「うわの空・空想」体験の多さを訴えるクライアントの場合には、体験を抑制するより、体験を通じて自分らしさを考え、同一性獲得を目指した支持的心理療法の有効と思われる。しかし、企業内の心理相談において「うわの空・空想」体験の多さを訴えるクライアントの場合では、「うわの空・空想」体験場면을統制し、現実の仕事・対人関係を向上させて、否定的に意味づけされた自己を肯定的なものへと変容していく必要があるだろう。

一方、外傷的状况については青年期後期、成人

期前期ともに、離人体験にあたる「自己の客体化」体験が多かった。そのため、Figure 1では外傷的状况から「自己の客体化」への矢印をより太く表した。このことは、「自己の客体化」が危機介入の指標として非常に参考になることを示している。しかし、「自己の客体化」体験は成人期前期になると「うわの空・空想」体験と関連して語られることに注意する必要がある。また意味づけを決定する理由も発達課題と大きく関連する。このように、日常的解離と精神的健康との関係においては、体験者の発達の段階、体験状況、体験内容、体験の意味づけといった多次元的にとらえていくことが重要である。そのようにクライアントを詳細に理解する際、本研究で作成したモデルは有効であると思われる。

しかし、本研究で仮説作成したモデルは、知見の応用できる対象・時期が非常に限定的である。まず、研究1の質問紙調査では、倫理的配慮から病歴・医療機関への通院歴を質問事項に加えておらず、健常群・臨床群の統制が曖昧である。更に研究協力に基づく面接調査であるため、「出来事の詳細健忘」「近距離への遁走」「感覚の鈍化」体験をもつ対象者は得られず、追面接調査対象者も女性のみになってしまっている。今後は、より十分な倫理的・安全的配慮を検討し、対象を統制・

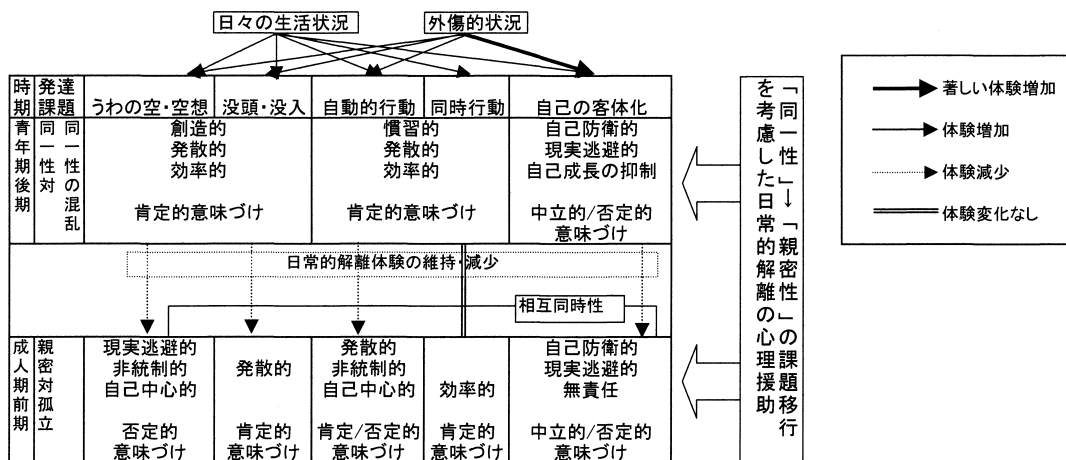


Figure 1 日常的解離大カテゴリーにおける体験・意味づけ変容モデル

拡大した長期縦断的な調査を行うことが必要である。そして、生成したモデルを精緻化していくことが急務と思われる。

引用文献

- 足立卓也・足立直人・赤沼のぞみ・武川吉和・池田弘司・足立 靖・加藤康夫・新井平伊 (2005). 一般成人・青年における解離性体験——日本語版解離性体験尺度 (J-DES) による定量評価—— 精神科治療学, **20**, 625-628.
- American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and statistical and statistical manual of mental disorders*. 4th ed., Text Revision. Washington, DC: American Psychiatric Association.
- (アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野 裕・染矢俊幸 (訳)(2006). DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院)
- Berstein, E. M., & Putnam, F. W. (1986). Development, reliability, and validity of a dissociation scale. *Journal of Nervous and Mental Disease*, **174**, 727-735.
- Carlson, E. B., & Putnam, F. W. (1993). An Update on the Dissociative Scale. *Dissociation*, **6**, 16-27.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1995). 対処方略の三次元モデルと新しい尺度 (TAC-24) の作成 教育相談研究, **33**, 41-47.
- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い 弘文堂
- 小西聖子 (2003). 心的外傷の概念 臨床心理学 **3**, 775-780.
- Kunzendorf, R. G., Crosson, M., Zalaket, A., White, J., & Enik, R. (1998-1999). Normal dimensions of multiple personality without amnesia. *Imagination, Cognition and Personality*, **18**, 205-220.
- Ludwig, A. M. (1983). The psychological functions of dissociation. *American Journal of Clinical Hypnosis*, **26**, 93-99.
- (ラドウィグ, A. M. 市田 勝 (訳) (1996). 解離の精神生物的機能 精神科治療学, **11**, 197-201.)
- 舩田亮太・中村俊哉 (2005). 日常的解離尺度 (短縮 6 項目版), 日常的分割投影尺度 (短縮 8 項目版) の構成概念妥当性の検討 パーソナリティ研究, **13**, 208-219.
- 舩田亮太・中村俊哉 (2007). 近年の国内における解離性同一性障害の分類について——一時的ストレス型 DID の心理臨床的検討—— 心理臨床学研究, **25**, 476-482.
- 能智正博 (2000). 頭部外傷者の〈物語〉／頭部外傷者という〈物語〉 やまだようこ (編著) 人生を物語る——生成のライフストーリー—— ミネルヴァ書房 pp. 185-214.
- 能智正博 (2001). 質的研究 下山晴彦・丹野義彦 (編) 講座 臨床心理学 2 臨床心理学研究 東京大学出版会 pp. 41-60.
- 下山晴彦 (編著) (1998). 教育心理学 II : 発達と臨床援助の心理学 東京大学出版会
- Strauss, A. L., & Corbin, J. (1990). *Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and technique*. New York: Sage Publications.
- (ストラウス, A. L., コービン, J. 南 裕子 (監訳) (1999). 質的研究の基礎——グラウンデッド・セオリーの技法と手順—— 医学書院)
- 田辺 肇 (2002). 解離現象 下山晴彦・丹野義彦 (編) 講座臨床心理学 3 異常心理学 1 東京大学出版会. pp. 161-182.
- 田辺 肇・小川俊樹 (1992). 質問紙による解離性体験の測定: 大学生を対象とした DES (Dissociative Experiences Scale) の検討 筑波大学心理学研究, **14**, 171-178.
- 田辺 肇 (2004). 催眠と意識現象——「解離」概念の検討—— 催眠学研究, **48**, 20-29.
- Willig, C. (2001). *Introducing qualitative research in psychology: Adventures in theory and method*. Buckingham: Open University Press.
- (ウィリッグ, C. 上淵 寿・大家まゆみ・小松孝至 (共訳) (2003). 心理学のための質的研究法入門——創造的な探求に向けて—— 培風館)

Changes in Normal Dissociative Experiences and Their Meaning in Japanese Young Adults: A Questionnaire and Case Study

Ryota MASUDA

Graduate School of Human-Environmental Studies, Kyushu University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2008, Vol. 16, No. 3, 295-310

The purpose of this study was to investigate changes in normal dissociative experiences and their meaning in Japanese young adults. In Study 1, 130 undergraduate, graduate, technical college students, with an average of 20.1 years of age, were asked to describe dissociative experiences they had. KJ analysis found eight main categories for the episodes: absent-mindedness and daydream, imaginative involvement and absorption, automatic behavior, simultaneous behaviors, detail amnesia, fugue, depersonalization, and desensitization. In Study 2, 28 undergraduate and graduate students, with an average of 20.6 years of age, who agreed to be interviewed after Study 1, participated. Three years later, three women were interviewed again, and results of case study for the three indicated that of the eight categories, they experienced absent-mindedness and daydream, imaginative involvement and absorption, automatic behavior, simultaneous behaviors, and weak depersonalization during the period. Analyses of their narratives showed that changes in experiences and meaning had strong relationships to developmental situations and tasks that the individuals faced.

Key words: young adult, normal dissociation, narrative, case study, developmental model of experience and meaning